

稲城の親愛なる白タク軍団、赤シャツや次仁扎西達と別れた私は、タクシーで昼間の内に荷物を置いていた黒帳篷ゲストハウスに戻った。

宿のフロントを通り抜けたリビングスペースでは、騒々しく洋楽のディスコミュージックが鳴り響き、宿泊者の西洋人達がグラスを片手にダンスに興じていた。しみりチベット世界との別れを惜しみたい私にとって、やっぱり此処は自分の来る場所ではなかったらしい。たった今別れてきた稲城の仲間達が恋しくて堪らない私には、この宿の雰囲気は別世界の空間だ。明朝のバスターミナルまでの遠い道のりを思い、わざわざ意に染まぬ不便な場所にやってきてしまった事を改めて後悔した。

リビングに背を向けそそくさとシャワーを浴びると、まだ誰も戻ってきていないドミトリー部屋の自分のベッドに早々と潜り込んだ。

翌朝目が覚めると直ぐに荷物を纏め、まだシンとしてるゲストハウスを足早に後にした。元はといえば話し相手が欲しくて選んだ宿だったが、結局誰とも一言も口をきいておらず、ただ眠る為だけにここやってきた訳だ。しかも、大きな荷物を背負って町の中を歩くのが面倒だった私は、再びバスターミナルまでタクシーに乗ってしまった。この日のうちに成都まで戻ってしまう事を思えば、もう神経質に懐具合を気にする必要もなかったが、安宿に泊まる為に往復タクシー利用なんてバカみたい。いったい今までの節約生活は何なんだ？ そんな自分が滑稽で苦笑した。

別に宿が悪かった訳ではない。バックパッカーの集まる場所は、その時々宿泊客によって宿の空気も変わるもの

だし、それがたまたま私の気分にならなかっただけ。きっとタイミングが悪かったんだろうと思う事にした。

早朝のバスターミナルは相変わらずの賑わいだ。思わず稲城軍団の顔を探してしまっただが、知っている顔には出会わなかった。康定から成都へ向かうバスは一日に何便か出ていたが、次の成都行きのバスの発車にはまだ少し時間があつた。所在なくターミナルの門の前でぶらぶらしていると、「成都！成都！」と声をあげながらやってきた四角い顔の小柄な中国系の男が、私を見ると近づいてきた。

「小姐、何処に行くんだ？」

「成都よ」

「そりゃ丁度いい。だったらタクシーに乗って行けよ。早いぜ。バスなら成都まで7時間だが、タクシーなら5時間だ。俺の弟が運転するが、腕は確かだぜ」

う〜〜ん、バスの発車時刻を待つのも面倒だし、タクシーを使えばより早く目的地に着けるのは確実だ。バス代と比べてそれほど料金が高くなる訳でもなかった。いいんじゃないの？ この旅の先々で出会ってきた気のいい白タクの運転手達のおかげで、こんな乗合タクシーがこの土地ではかなりポピュラーである事も既に判っている私には特に躊躇する理由もなく、ちょっと考えて乗る事にした。どうせこの国じゃバスだろうと白タクだろうと事故の確率など同じようなもんだ。その点については、もう運を天に任せるしかないのだ。

「いいわ。乗る」

「そう来なくっちゃ！ よし、他の客を集めてくるからちょっと待っていてくれ」

程なくしてタクシーが定員一杯となると、客引きの男を一回り小さくした様な、やっぱり小柄で四角い顔の若い運転手が現れて、成都に向かって出発した。運転席の隣に座らせて貰った私は、目の前に広がる風景を広々と眺められて気持ちが良いが、血気盛んな若い男といった風体の運転手は、案の定勢いよく車をブツ飛ばすのでちょっとハラハラしてしまう。既に馴染の道となっているこの道路で、懐かしい記憶と一致する場所を探しながら風景を見ているのは楽しいものだが、起きているのは心臓に悪い。そう思ってウツラウツラし始めた頃に食事休憩となった。

運転手が1人、タクシーの乗客が4人、街道沿いのバラック建てのような食堂で各々好き勝手に食事した。私はといえば特にメニューも無い店で何を頼んだらいいかわからないのと、康定で浪費した宿までの往復タクシー代と成都までの乗合タクシー代を支払った事で完全に底を付く寸前の懐事情もあり、注文は相変わらず一杯の汁麺だけだ。

サッサと食べ終えてその辺をブラブラしていると、シャツを脱いで上半身裸になり、数種類のおかずをテーブルに並べてワシワシと豪快に昼食を食べていた運転手の男が、「小姐、座れよ」と私を招き、一緒に食べると自分のおかずを勧めてくれた。それまで余計な会話は一切せず、特に友好的な雰囲気は感じられなかった男だが、この時になって初めて少し話してみると、案外気のいい人間の様だった。

男の背中には真空にしたカップを背中に当て、皮膚を吸わせて血行を促す中国古来の健康法(中国語で火罐、日本では吸い玉というらしい)の施術した跡の丸い痣がたくさん並んでいた。裸で飯をかきこむそんな男の姿が、いか

にも中国を感じさせた。

この旅の始まりで成都に滞在していた折に感じていたのは、中国の男の脱ぎっぷりの良さだ。中国の中でも南部に属する四川省の夏は熱帯に近い。その為か比較的庶民的なエリアに所在する成都の宿の周辺で見かけた男達は、皆、短パンに上半身裸姿で街の中をウロついており、やたらと裸の男達が目についた。近所の庶民的な食堂などは、何処も酒を酌み交わす熱気ムンムンな裸の男達の集団でいっぱいになっており、ある意味壮観とも言えるその風景には、少なからずカルチャーショックを受けたものだ。

これまでは山岳地帯の寒冷な気候の中で過ごしていた私は、久しぶりで出会った男の裸姿に、ああ、中国の下界に戻って来たんだな〜と妙な実感を覚えていた。

昼食後はあっという間だった。ちょっと居眠りしている間に車は成都まで到着してしまい、確かにバスよりずっと早い。おまけにバスターミナルから再び重い荷物を担いで目的地までの移動が、タクシーであれば自分の降りたい場所まで送って貰えるのがとっても有難かった。これは乗合タクシーを利用して大正解だ。

それにしても車の窓から眺められる一ヶ月ぶりに戻って来た成都の都会の街並みは、行きかう人人人、車車車、立ち並ぶビル群と、私がこれまで過ごしていたチベットの小さな街とは別世界だ。必要最低限の暮らしの中で十分心地良く過ごしていた私には、またこの物が溢れる飽食の世界に放り込まれるのかと思うと、ちょっぴり怖気づいてしまうような心持となっていた。

成都では前回と同じ宿に滞在した。この場所もバックパッカーの集まる旅人宿だが、旅好きな日本人女性とシンガポール人男性が旅先で知り合い夫婦となって、この地で始めたというゲストハウスは旅する人間にとって居心地が良く、安全な場所だった。財布の中に残っていた、ほんの数十元の中からこの日の滞在費を支払うと、この日の夕食にやっとな杯の麺が食べられる程度の金額を残して完全にスッカラカンとなってしまった。

旅のスタート時から心もとなかった懐具合のこの一ヶ月を、良くここまで持たせる事ができたと思うが、それは私に食事をご馳走してくれたり、車に便乗させてくれたりした、多くの人の好意に支えられてのものだ。旅の間中ずっと不安を抱えてきた中国元の残額の問題も、日本円からの両替が可能な都会まで辿り着けば、もう心配する事もない。明日早速銀行に行って両替しよう。

それにしても一ヶ月ぶりに戻った宿の雰囲気はだいぶしっとりしていた。前回の滞在時は8月の初めだった。大学の休みなどを利用してやってきていたバックパッカーの若者達でムンムンと賑わっていた中庭のテラスも、9月に入ると旅行者が減ってしまうのか人影がまば

らだ。だが、その時の私にはその静かさが心地よく思われた。

翌日最初にやったのは銀行での両替だ。今までずっとカバンの奥底で眠っていたT/Cを1万円分両替し、お金の心配から解放された私が続いて訪れたのは旅行代理店だ。

当初、四姑娘登山の仲間と訪れた旅行で帰国便のチケットを捨て、中国に居残って旅を続けていた私には日本に帰国する為の航空券が無い。あと数日のビザが切れる前に航空券の手配をし、帰国しなければ不法滞在者になってしまうのだ。手持ちで持ってきた現金とT/Cのみでは航空券の購入には心もとなく、海外でクレジットカードを使った経験のない私には、ちゃんと航空券が買えるのかちょっぴり心配だったが、なんとか無事にビザ期限の最終日に日本へ帰国する便のフライトチケットを手に入れる事ができた。

お金と航空券、2つの大きな心配事が解消された私は、帰国までの残りの3日間を毎日当ても無く成都の街をブラついて過ごした。振り返れば、毎日のように何かが起こり、誰かと出会っていた旅の日々と比べ、誰とも知り合わず目的も無く、ただ街を歩き回る都会の生活は単調で孤独だった。

広大な土地にこれでもかとはばかりに溢れかえっていた輝く大自然の代りに、目に入るのは飽食にまみれた物の洪水と人ごみと騒音と排気ガスばかりだ。せかせかと早足で歩き去る都会の人々は他人には無関心で、有名な公園に行っても、繁華街を歩いてもどこか空虚で空しい気持ちでいっぱいだった。足は自然に成都の街の片隅にあるチベット人街に向いてしまう。だが、カムパのいでたちをした男達やチベット服に身を包む女性の姿に密かに心を高鳴らせても、そこに暮らすチベット族の人間は皆商人で、ただの旅行者である私は店の商品を買ってあげなければ、単なる用無しの異邦人なのだ。

成都の街に飽きてしまった私は、3日目にはちょっと遠出をして、バスで2、3時間程度の場所にある樂山大仏を見に行ってみたりもした。2つの太河がぶつかり合う合流点にそびえる大岸壁に、全長70メートルともなる巨大な大仏を掘り抜いたこの樂山の磨崖仏は、世界最大の仏像なのだそうだ。その立地やスケールの大きさ、急峻な岩山の階段を上り下りして直に磨崖仏に触れたり、太河の波に揺られながら船上で磨崖仏を眺めたりと自然のアトラクション満載の樂山大仏見学は、本来の私なら大喜びしそうな場所なのであったが、この時はそれすらも心に響いてこなかった。その日の私の心を占めていたのは、ただ、あの優しい人達の住む天空の世界が恋しいという思いばかりだった。

(次号に続く)